

健康万歳 ①

「人生50年」は死語となり、今は人生80年の時代となった。しかしこれは平均寿命のことで、健康寿命となるとそうはいかない。

男性が79歳、女性は86歳と公表され、この性差は何時まで経っても逆転しない。しかし江戸時代は女性の方が早死にしていたと記録に残されている。非衛生的での出産と、厳しい生活環境下での家事が原因と思われる。明治に入ると平均寿命は30歳、死因第1位は結核が占め、死病とまで言われていた。

時代が変わり昭和世代では第1位脳出血、最近になって第3位くらいに長く留まっていた癌が逆転、死因第1位の王座を占めるようになっていく。

原因は長生きするようになり、脳疾患が治る病になったからでもある。そのうちこの模式も変わり、「癌が治る病」に変身する時も近い将来訪れるのは確実で、平均寿命がさらに伸びることはまず間違いない。

その昔「古来稀なり」と言われ祝って貰った古希も今は色あせてしまい傘寿、米寿は珍しくもなるともない。「100歳の同窓会」が夢ではない

時代もそこまで来ている気がする。

一方認知機能の低下により生活に支障を来たす認知症が今一番深刻な問題として捉えられてきた。

約300万人の患者さんがさらに高齢化することによって増加するの現実、記憶低下ひいては妄想・徘徊など周りが騒ぐほど本人は気づいていないかも知れないが、神は「忘却」と言う粋な贈り物をしたと思っている。

明るく健康で長生き、これが最高の幸せな時代到来、さして遠くは無い。

林 榮一

(医師・八女市立花町)

街かど gallery



筑後市
池田 町子

旅先で美しい風景に出会う時、水彩画にして思い出が残せたらいいなと思っていました。そんな折、田代喜玖生先生のお教室を知り、すぐに入会させて頂きました。

ところがみなさんは油絵だったのでもついて行けないと思ったのですが、先生は丁寧に指導して下さいました。お蔭で友達も出来てお教室が大変楽しくなりました。なかなか上達しない自分が情けないです。私は桜が大好きです。今年も各地で桜を見ました。来年も再来年も、更にその次の年も元気で桜が見られる様に、がんばりたいと思っています。

矢部川と千間土居 ①

矢部川は氾濫を繰り返す「天井川」であった

矢部川の名称は江戸時代以前は単に「川」とか「大河」と言われ、江戸時代になって柳川藩(立花宗茂)と久留米藩(有馬豊氏)の境界を矢部川の中央としたことから御境川とも言います。その後、年代は定かでないが今の矢部川の名称となった。

河川整備がされる前の藩政時代は、川の性格を表す言葉として、筑後川を「暴れ川」、矢部川を「天井川(てんじょうがわ)」とも言って、「暴れ川」は勿論のこと、「天井川」は川底が浅いために大雨の度に洪水が起り冠水(かんすい)(堤防を越流)や堤防の決壊等で、流域の住民・住居や田畑に大きな被害を起こしていた。

このため柳川、久留米の両藩とも如何にして被害から住民・住居や田畑を守るかが大きな課題で、河川氾濫を防止する治水事業は藩政の重要事業であり両藩とも様々な方法が行われた。当初は川水の氾濫を防ぐために霞堤(かすみでい)や遊水堤と言



1695年につくられた護岸工事の千間土居

って、洪水のさいには冠水することを前提にし、土手にはハチクやマタケ、メダケ、ゴサンチク等の竹を植栽したり、人為的に土手を切って冠水した水の水位を減水する等の方法もとられていた。特に柳川藩では、元禄8年(一六九五)に河川の氾濫を防止するために大々的な治水工事を矢部川南側に行っているが、これが後述する「切る時は、木六、竹八、葦九月(何れも陰暦)、惣馬の首は今が切り時」と言う大変物騒な鬱憤ばらしの歌までできている。

野中 重之(広川町)

大なる山頂阿蘇 (1592m)

人からよく「この寒いのになんで山に登るの?」と聞かれる。山に登るのは決して楽ではないけれど、頂上を極める達成感や爽快さだけではない。行き交う人同士のあいさつも登山ならではの良き慣習だと思う。

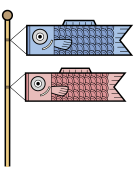
さて今回は、砂千里ヶ浜をスタートして阿蘇山最高峰を目指す。1時間も登ると、雄大な中岳火口は噴煙を上げておりガス発生警告に早々現場を離れて高岳へ向った。縦走の楽しさは岩や崖を登ったり、景色を独り占めにして目に焼きつけていたい気分から来る。そしてカルデラ壁に、太古代大噴火でできた自然の力と美を真近に眺めることができた。

この日は天気恵まれ大パノラマを満喫したが、2月に悪天候で登った男性がここで命を落としている。気象がはずれると慣れた山でも大惨事になりかねない。万全の備えと心強いメンバーのお陰でいつまでも心に残る阿蘇山でした。

八女文化連盟写真部 樋口 清人



眩き



山登り
だよ
人生は!



さつきの空に鯉職が泳いでGWの行楽たけなわ。多くの人が日本全国、海外にまで出かけます。さて人はなぜ旅に出るのでしょうか。人生は旅。深く考えずとも旅立ちはいつも心弾みます。見聞を広め、非日常の世界に浸ること心身をリフレッシュさせ、脳を若返らせてくれる、旅の効用は大なるものがあります。かく言う私も年に一度位は旅に出ます。豪華客船クル

ーズなど望むべくもありません。安・近・短、一泊二日の小旅行です。旅は道連れ、妻が、杖代わり、ナビ代わり、行く先々で喧嘩道中です。何を食べるか…。何を着るか…。写真はどこで…。ひとつとして意見が合いません。ワイター、ワイターを連発しつつ、「景色よりトイレが気になる観光地」巡りのツアーに疲れ果てて帰宅、我が家の風呂にバシャバシャ浸かった後食べるお茶漬けのうまいこと…。期せずして二人とも「やつぱうちが一番良か。」おいしいもの、

珍しいものを期待し、もっと楽しいことはないかと追い求めた青い鳥ですが、毎日の平凡な暮らしの中にこそ本当の喜びはありました。久しぶりに細やかな妻の思いやりに触れ、家族の絆を確かめられて、みやげの出費はかさんだが、差し引いても旅はお安い投資だったのかも知れません。

(はるお)

文中の川柳はシルバー川柳へボプラ社より。ワイターは八女地方の方言で驚き、感動した時の表現。